

会員紹介：福田幸正さん

私の略歴



1955年京都生まれ。1978年に大学卒業後、海外経済協力基金（OECF 1999年にJBIC）に就職。ODA円借款実施業務に従事。国内出向は、外務省経済協力局有償資金協力課、（財）国際開発高等教育機構（FASID）。海外勤務は、OECFワシントン駐在員事務所、OECFカイロ駐在員事務所、中東・北アフリカ開発銀行設立移行チーム（カイロ）、アフガニスタン政府アドバイザー（カブール）。2007年より、（公財）国際通貨研究所、開発経済調査部主任研究員、上智大学非常勤嘱託教員（2007年～）。

従事した仕事の内容

OECF/JBIC時代（1978-2007）の29年間のうち、海外勤務10年（34%）、出向7年（24%）、中東業務担当10年（34%）となり（重複あり）、結果的に、外と中東業務が長かった、ということができると思います。

OECFで配属順に従事した主な業務の概要をエピソードとともに紹介させていただきます。

タイ、マレーシア、ビルマ、ベトナム担当部署（1978-80）

最初に配属になった部署で、はじめはビルマの商品借款の管理を任されました。ビルマから送られてくる書類は、ベージュ色のわら半紙のような紙質で、折ると砕けそうな代物だったことを思い出します。また、中越戦争（1979年）が勃発しましたが、ベトナム商品借款による購入品が基礎物資にシフトしていく様子を目の当たりにし、戦争を感じて緊張したことを思い出します。書類のやり取りを通して世界とつながっているのだ、という実感を覚えました。だからこそ、テレックス一本でも立派な技術協力。心して当たれ、と教育されたものでした。

とにかく無数にある輸出契約のフォローを通して貿易実務を吸収することが新人に与えられた仕事でしたし、一見単純そうな業務の中にも前述のような発見もありました。そのうち徐々に、開発資機材型、プロジェクトへと段階的に高度な業務を任されるようになり、と、今では言えますが、当時は何をやっているのか訳もわからないまま、忙しく日々が過ぎていったような気がします。この時期は、海外との通信手段は主にテレックスでした。また国際電話料金は高いので、一々申請書を書かされていました。

最初の出張は、マレーシアのタイ国境に近い水力発電事業の審査でした。



思い出深いホテルの前で
(クアラルンプール)

その後マレーシアを訪れたのは 30 年以上後の 2008 年になります。30 余年ぶりの首都クアラルンプールが先進国の都市と全く引けをとらないくらい垢ぬけていることに驚かされました。昔の面影を探して歩き回っていましたが、偶然、初出張の時に宿泊したホテルを見つけました。薄暗いロビーは外の喧騒がうそのように静かで、そこだけは時間が止まり、30 余年前の駆け出しのころの自分の気配も漂っているような不思議な気持ちにとらわれました。

事務合理化、法律相談担当部署（1980-82）

業務のコンピュータ処理化が始まるところでしたので、システム設計に関わることを通して最初の部署でやっていたことの意味がやっと分かった次第です。円借款事務処理上の内部向け相談窓口でもありましたので、様々な事案が持ち込まれてきました。場合によっては顧問弁護士と確認しながら対応を助言する部署でした。多くのイレギュラーなケースに触れる機会がありましたので、その後の業務で役立ちました。ファックスが導入され始めた時期でしたので、テレックスを打たなくても手書きペーパーをそのまま電送できるのは大いに助かったのですが、字の下手さがばれてしまうことが問題でした。そのうち、ローマ字入力のワードプロセッサも導入されはじめましたので、職員の悪筆の問題は自然解消されて行きました。文書手書き時代には、“基金（OECD）の三筆”と呼ばれた偉い先輩方もおられましたっけ。

ワシントン駐在員事務所（1982-84）

OECD ワシントン初代首席駐在員の安芸さんの下に、二代目の駐在員付として赴任しました。前任は企画庁の遠藤さん。遠藤さんとはご縁に恵まれ、それから 10 年後にカイロに赴任した際、JICA 専門家としてエジプト計画省のアドバイザーをされていた遠藤さんと再会することになります。主な業務は世銀、UASID、米州開銀といったワシントンベースの機関との連絡。二代目の所長は小倉さん。開発に携わる者の心構えを叩き込まれました。ワシントンはいわば世界の中心。舌を巻くような優秀な人々が集まる街での二年間はあっという間でした。大来さんと初めてお会いしたのもワシントンでした。その後、この思い出深い美しい街に何度か戻ってくるようになります。

バングラデシュ、中国担当部署（1984-86）

ワシントンからアジアの最貧国バングラデシュとは大きな違いですが、久しぶりに業務に戻れたことが嬉しかったからか、当時はそんなギャップは考えもしませんでした。初めてダッカ空港に降り立ったとき、手のない手と死にかけた赤子を差し出す女たちに詰め寄せられ卒倒しそうになりました。誰しも経験するショッキングな通過儀

礼のようなものですが、ここがバングラデシュを好きになるか嫌いになるかの分かれ目（中間はないそうです）。幸い自分はこの国と人が大好きになりました。当時、駐在員事務所がなかったので、結局 2 年間で 6 回出張したと思います。最初の出張はプラントバージの審査。父親くらいの年上の電力省の担当者から、公僕としての心得を諭されたことを今でも感謝しています。また、彼が、「これまでの援助ありがとう。これからは独り立ちします、と援助国に言えたらさぞかし胸がすくだろうなー」と吐露していたことが忘れられません。今から振り返ると、一人で（電力省の老運転手さんと彼のオンボロのローバーに乗って）よくまあ僻地まで山超え（同国で山と呼べるのは、東部のチッタゴン丘陵地帯）河超え行ったものだと感心します。きっと若かったのでしょう。途中で 2 カ月間、マニラの AIM(アジア経営大学院)で開発管理コースの研修を受けました。マルコス政権最後の年でした。

中国円借款第 2 ラウンドの水力事業も担当しました。審査のために初めて北京を訪れたのは白い綿状の柳の実が舞う五月頃だったと思います。今から思うと、当時は中国側にとっても日本側にとっても、過去の歴史は手が届く出来事。双方とも相手のよいところも悪いところもよく知っている者同士。緊張感を持ちつつも、一目置き合う関係だったと思います。ソ連留学の経験はあるが英語は独学という水電部の劉さんが、審査の合間に息抜きにとドライブに誘ってくれました。そして気が付くとそこは北京郊外の盧溝橋。車を降りた劉さんは、いつもの静かな笑みを浮かべているだけでした。寒春の黄昏時、二人は何も言わずに弾痕の残る狍犬の欄干が続く橋のある風景を眺めていました。それ以来、中国本土には行っていません。

外務省経済協力局有償資金協力課 出向（1986-88）

バングラデシュ出張を終えての帰国の途路、バンコクに立ち寄りしました。そこでフィリピンのマルコス大統領がアキノ革命で国を追われたことを知りました。マルコスはハワイに亡命した際、秘密文書をごっそり持ち込み、その中に ODA を巡って日本企業との癒着関係を示すとされた文書が暴露されました。いわゆるソラーズ文書です。そんな話を他人事のように聞き流して帰国したのですが、その直後に当時人事課長だった小倉さんに呼び出されて外務省出向を言い渡されました。配属は円借款を主管する経済協力局有償資金協力課。それもなんと、フィリピン・ビルマ・マレーシア班 (OECD 出向者は代々同班に配属)。配属直前に開始していたいわゆるマルコス国会は、その後一年余り続き、残業時間がひと月 200 時間を超えるような世界に放り込まれました。苦楽を共にすると、特に苦を共にすると本当の友を得る、というのは真実でしょう。そんな中で素晴らしい三人の外交官に巡り合うことができました。しかし、その後三人とも相次いで若くして鬼籍に入られました。

マルコス疑惑を契機に、ODA の情報公開が進むことになりました。マルコス疑惑でひるむことなく、経済協力局は新たなアンタイドの無償商品援助スキーム、いわゆるノンプロ無償を立ち上げます。このタスク・フォースのメンバーとして、商品借款の知識を提供しました。その 15 年後、カブールにアフガニスタン政府アドバイザーとして

赴いた際、図らずもノンプロ無償の同国への導入に関わることになりました。

海外事務所管理、協調融資担当部署（1988-91）

OECFの海外事務所の管理と、世銀等との協調融資の促進・他の先進国の援助機関との協調、というハイブリッドな業務を扱う部署でした。アフリカを中心として世銀の構造調整融資との協調融資が進んだ時期でもありました。天安門事件（1989年6月）の際には、駐在員と留学生が無事帰ってきて、一人ひとりの顔を直に見るまでは気が抜けませんでした。まさに命からがら、着の身着のまま転がり込むように帰ってきた駐在員に、サイズの合わない背広上下を貸したことを覚えています。フィリピンやバングラデシュも政情不安でやきもきさせられました。

ASEAN 諸国、インドシナ、大洋州担当部署（1991-92）

1992年、マルコス政権を倒したコラソン・アキノ政権の最後の年に香港で開催されたフィリピン援助国会合に出席しました。外務省出向時代にマルコス疑惑対策と新規フィリピン支援に関わったこともありましたが、次期ラモス政権への円滑な政権移行が予定されていることにも、感慨深いものを覚えました。

インドネシアに初めて出張したのもこの部署時代です。企画庁の幹部とともに主要なODA案件の視察のために広い国土をあちらこちらまわったのですが、自分のルーツはインドネシアかもしれない、という直感を抱きました。次のジャカルタ出張は20年以上も間を置いた2013年。見違えるように発展した都市を目の当たりにして、「開発って、いいなー」と単純に感激したものでした。

カイロ駐在員事務所（1992-96）

環境ツーステップローンの交渉でジャカルタ出張中に、総務部長から国際電話がかかり、カイロ首席駐在員を仰せつかりました。とにかく準備を始めねばと、髭を生やしたのですが、現地にいってみると髭面はマイノリティーでした。

エジプトに対しては、特例的な債務削減措置がとられたために、新規円借款が止まっていたので、これ以上悪くなりようがない状況、と開き直り、多くの管轄国を頻繁に出張して、直にプロジェクトと関係者に接することにしました。エジプト国内は別にして、出張回数の多かった順では、ヨルダン、シリア、トルコ、レバノン、イラン、サウジアラビア。二人事務所でしたので、カイロ空港でバトンタッチ、ということもありました。これらの国のいくつかは現在紛争状態だったり、紛争の影響を強く受けたりしており、当時一緒に働いた現地関係者の安否が心配です。エジプトとのリスケ合意書交渉、シリアの火力発電所の再入札への立会、イランとの水力発電所の事前交渉など、めったにできない経験として印象深く記憶に残っています。

そうこうするうちに中東和平の機運が高まり、1993年9月13日、イスラエルとPLOの間で世紀の和解とも言われた「オスロ合意」が調印されました。テレビでホワイト

ハウスでの調印式の光景を見ながら大いに感激したものでしたが、この時はまさか自分が中東和平プロセスの流れに関わることになるとは想像すらできませんでした。

中東・北アフリカ開発銀行（中東開銀）設立移行チーム（1996-98）

オスロ合意以降、中東和平プロセスは急展開していきますが、その中から、イスラエルとパレスチナが手に手を取り合って、紛争のために中東だけがない地域開発銀行の設立を国際社会に求めました。このような地域内部からの動きを歓迎して日本は米国とともにいち早く賛同の意を表していましたので、たまたまカイロにいた自分が中東開発銀行設立準備委員会（カイロ）に派遣されることになったということです。当時の大蔵省の本件の担当課長がワシントン時代に一緒だったことは奇遇でした。ワシントンの財務省に赴き、インタビューらしきものも受けました。

米務省の先導で、他のチームメンバーと一緒に Capitol Hill 行脚もさせられました。米財務省の法務官と彼のこれ以上散らかりようのない狭い執務室で、本部協定から総裁の雇用契約まで 4 日間缶詰めになって起草したことも今では楽しい思い出です。この法務官は、米軍従軍ユダヤ教ラビとして終戦直後の日本に駐留した経験があるせいか、大の日本びいき。彼の執務室の壁には大きな浮世絵のポスターが貼ってあったことを思い出します。（その後、好きなバスケットボールに興じている最中に、心臓まひであっけなく亡くなってしまいました。どうしてこうもよき友が福田から去っていくのでしょうか。）

中東開銀設立のための国際専門家チームの構成は、自分の他には、米（チームリーダー）、オランダ、イタリア、カナダ、エジプト、イスラエル、ヨルダン。合計 8 ヶ国 8 人のチームで、エジプト政府が他に 2 人の秘書を提供しました。米国のチームリーダーはカイロに常駐できないので、福田が Resident Director としてカイロでチームの取りまとめ役を務めました。チームは銀行設立に必要な文書や政策ペーパーなどを整えていったのですが、その間徐々に中東和平の環境は悪化し、それに伴ってチームも



中東開銀移行チームオフィス、
カイロ、1998 年 1 月)

一人去り二人去りし、とうとう 1998 年末、最後に残った自分が事務所をたたみ、鍵を閉め帰国した次第です。結局、経済協力は政治に先んじることはできない、という単純な真理が立証されたのだと思います。中東開銀設立構想は棚上げ状態にされ、今日に至っていますが、裏を返せば、まだ死んではいないということです。

中東情勢の悪化によって、チームの中が浮足立ってきたある日、こまごました残務処理をしていましたら、決してお互いに言葉を交わし合うことがなかったイスラエルとヨルダ

ン（西岸出身パレスチナ系）の専門家が、入れ代わり立ち代わり福田の部屋にやってきて、奇しくも同じ労いとお別れの言葉を残していきました。あの時のことを思い出すと、今でも胸が熱くなります。

中東、欧州担当部署（1999-2000、2001-2002）

成田に着いたのは、1998年のクリスマスイブの夕刻。カイロにいたころ、日本はバブル崩壊で相当疲弊しているような報道がされていたので、さぞ寂しいイブと思いきや、高速道路は激しい渋滞で、自宅にたどり着いたのは深夜を過ぎていました。帰国後、早速取り組むことになったのが、トルコのイスタンブール地下鉄と、想定外のトルコの緊急震災復興円借款でした。イスタンブール地下鉄は1999年度に入るまでのプレッジが必須でしたので、カイロから帰国して数カ月しか時間がなく、サラリーマン生活最大のピンチ、と悲壮な覚悟で臨みましたところ、アンカラでの4日間の集中交渉でセットすることができました。トルコ側実施機関による対トルコ財政当局交渉を側面支援することに徹したのがよかったのだと思います。

トルコ側の実施機関の担当者は優秀な女性でしたが、事業が政治のおもちゃにされたり、男社会の中でメガプロジェクトを担当することへのやっかみやらで、大変苦勞されました。そんな彼女への励ましも込めて、中東開銀での教訓 “Success has many fathers. Failure is an orphan” をお伝えしたところ、膝を叩いて「その通り！」。早速プレートにして事務所内に飾っていました。イスタンブール地下鉄実現のために生涯をかけていた彼女の大学時代の同級生でもあるチーフエンジニアは、「イスタンブール地下鉄は、私の信仰のようなものだ」と言い切っていたことも忘れられません。二人のその後の消息はわからなくなりましたが、この事業の本当の功労者は誰なのかは、それははっきりしています。彼らの名誉のために、この場を借りて二人の名前を記しておきます。Ms. Simin Pehlivan Mr. Zafer Ozerkan

1999年8月の1万7千人が犠牲となったトルコ北西部大震災に対する緊急震災復興円借款について一言。この種の事業はスピードが何よりも重要ですが、地震発生から2カ月弱でプレッジが実現しました。それは、震災直後に世銀本部の担当課長と、在京トルコ大使館の財務庁アタッシュとのコンタクトをそれぞれ確立したことが奏功したのだと思います。その際、普及し始めたEメールが大いに威力を発揮しました。

ヨルダンの観光事業も忘れられません。ヨルダン側の前任のプロジェクト・マネジャーが辞めた機会に、新プロマネと一緒に、全てのサブ・プロジェクトを見て回ることにしました。その一つに、バザールの遊歩道を整備する部分がありましたが、遊歩道が整然と整備されていくのと同時に、バザール商人たちは、自分達の店先を清め始めたというのです。これを捉えて新プロマネが、「郷土愛、さらには愛国心というのは、こんな風に始まるのかもしれない。」とつぶやいたことが琴線に触れました。「彼に任せておけば大丈夫！」と確信した瞬間でした。彼はその後、サウジアラビアのメガ・リゾート開発事業を手掛けることになりヨルダンを離れましたが、つい最近、そろそ

ろ故郷に帰って再就職したいということなので、喜んで推薦状をしたためてあげたところでした。

アフガニスタン政府アドバイザー（JICA 専門家）（2002-2004）

2001年9月11日の米国同時多発テロ事件は世界を震撼とさせ、その後の世界を一変したといえるでしょう。当時、南西アジアもカバーしていましたが、アフガニスタンの成り行きには関心を持ってフォローしていました。そうこうするうちに、外務省から、旧 OECF スタッフをアフガニスタンに派遣できないか、という話がありました。そこで恐る恐る手を挙げましたところ、かなりのスピードで派遣が決まりました。



下中央：ガーニ財相（当時），
その左後ろ：福田，2004年3月、
ガーニ氏私邸にて

配属先は、新設の援助調整庁（後に財務省に吸収）。国際社会からの援助の調整、予算案編成、現地職員教育などが担当です。そこで15年前の外務省出向時代に手がけたノンプロ無償の実際の適用に関わるとは、思いもよみませんでした。援助調整庁の長（後に財務大臣）はシュラフ・ガーニ氏。現在アフガニスタン大統領候補です。ノンプロ無償の実施契約については、数日間缶詰めになって稟議書を作りガーニ氏に届けましたところ、一晩かけて読むから翌朝あらためて来てほしい、と言わ

れました。ガーニ氏はどんなに多忙でも読むといたら読みこなす方です。翌朝緊張してアフガン人の同僚とともにガーニ氏の私邸に赴きましたところ、ソファーにゆったりと座ってにこにこしておられました。両脇の椅子には彼の特別アドバイザーが（イギリス人とオーストラリア人）陣取っていましたが、ガーニ氏は兩人をちらっと見て「サインしますよ。いいですね。」と一言。両特別アドバイザーは無言で首肯。ガーニ氏はおもむろに懐から万年筆を取り出して、一気に署名されました。説明用にと日本的にどっさり資料を抱えていったのですが、こんなにあっさり決裁が済むとは思いませんでした。

後で知ったのですが、その前日、ガーニ氏は福田のアフガン人同僚を呼びつけ、福田の日頃の仕事ぶりなどを聞き出していたとのこと（雇用主としては当然のことですが）。結果オーライなので、ガーニ氏とアフガン人同僚が何を話し合ったかは聞いていません。ガーニ氏とは日本帰国後も東京で二回お会いする機会に恵まれました。ご本人からは、暗殺の危険を覚悟で大統領に立候補されたことを聞きましたが、とにかく安全とご活躍をお祈りしております。そして、いつかまた非力ながらお役に立てればと思っています。

国際開発高等教育機構 (FASID) 出向 (2004-05)、JBIC 開発金融研究所 (2005-2007)、国際通貨研究所 (2007～現在)

アフガニスタンから帰国後、FASID に、そして引き続き JBIC 開発金融研究所に配属になりました。2007 年、JBIC を退職し、国際通貨研究所に就職、今日に至っています。

FASID では、外務省の日本 NGO 支援無償のスキーム評価を手掛けることになり、ケーススタディーとして初めてカンボジアに出張しました。学校がお寺の境内の寺子屋から復興している様子を見て、カンボジア復興の鍵は、仏教かもしれない、と直感しました。それはそれとして、なぜこんなに優しい笑みを返してくれるカンボジア人が、キリング・フィールドといわれるような大虐殺を犯すことができたのか、謎は深まるばかりでした。

JBIC 開発金融研究所では、平和構築を担当し、OECD DAC の「脆弱国取り組み原則」の起草に関わり、アフガニスタンなどでのこれまでの経験を反映することができ、貴重な体験となりました。日本の主張として同原則に組み込むことができた主な点の一つは、「細々としたものであったとしても、実際に機能している土着の制度を注意深く掘り起こし、それを当面の課題の解決のために活用する。その延長線上に、その国固有の社会経済のあり方に沿った制度の構築を支援する。」という趣旨の文言です。

国際通貨研究所では、これまでの OECF 時代の経験を各種の調査に活かすことに努めています。その間、2012 年に IMF・世銀東京総会が、48 年ぶりに東京で開催されました。当初はエジプトで開催が予定されていたのですが、「アラブの春」の混乱で、急遽日本が受け入れることになりました。「今回の総会は、世界に対して日本の価値を印象付けるまたとない機会」との行天理事長の檄に押されて、できるだけ多くの関連セミナーに出席し、池上彰ではありませんが、いい質問をして総会を守り立てることに努めました。質疑応答で 3 回あてられました。米大手紙主催セミナーの Q&A でのキム世銀総裁とのやり取りは実に愉快でした。

- キム総裁：「自分が子供のころ、日本が目を見張るような経済成長を遂げている姿は、同じアジア人として誇らしかった。・・・日中韓が協力すれば、世界のために大きな貢献ができるはずだ。」
- 米大手紙対談者：「しかし、歴史は常にそうはならなかったことを実証している。」
- キム総裁：「・・・」
- 福田：「キム総裁。日中韓の連携を恐れるものは誰だ、・・・という質問にはお答えいただかなくても結構です。」(引き続き、inclusive growth の定義を質問しました。)

仕事上の苦勞と喜び

仕事上の苦勞と喜びについては、上記の「従事した仕事の内容」の中に織り交ぜて述べたつもりですが、あらためて振り返りますと、苦勞が苦勞として記憶に残っていない

いのです。しかし、喜びははっきり覚えています。途上国での仕事では、相手が信頼できると踏んだら、細かいことは言わずに任せること。そしてうまくいったら一緒に喜びあうこと、に尽きると思います。これがやみつきになって今日までやってきているのかもしれませんが。この点、一つ言い添えるとすると、途上国側も我々を信頼するに足りるかじっくり値踏みしていることを忘れてはなりません。

私の生き方

あらためて自分の歩んできた道のりを振り返ってみますと、実に不思議な縁の連続を生きてきたと驚かされます。

これからの生き方ですか？

実は、この春、初孫が生まれました。お食い初めの祝いにと、息子から紙粘土の人形をリクエストされましたので、この会員紹介を書き終えたら制作に取りかかります。自分は自称紙粘土作家、そしてクレヨン画家でもあります。粘土、クレヨンはこどもが最初に手にする図画工作の材料ですが、実に表現力が豊かなものがあります。この道を極めることをライフワークにするかもしれません。